

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：32632

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520245

研究課題名(和文)日本文学における「怪異」研究の基盤構築

研究課題名(英文)Foundation building of a "weird" study in a Japanese literature

研究代表者

藤澤 秀幸 (FUJISAWA, HIDEYUKI)

清泉女子大学・文学部・教授

研究者番号：20245939

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：研究会を開催してメンバーの怪異についての研究を報告し合った。その成果を公開シンポジウムで発表した。1年目のシンポジウムのテーマは「日本文学の怪異 信じる？ 信じない？」であった。2年目のシンポジウムのテーマは「日本文学における怪異と猫」であった。4年目のシンポジウムのテーマは「日本文学における 死と救済 怪異の視点から」であった。5年目に、韓国の5人の研究者を招いて、国際シンポジウムを開催した。そのテーマは「文学における 死と救済 東アジアの怪異の視点から」であった。このシンポジウムは書籍化されて出版されることが決定している。「怪異データベース」と「怪異研究文献目録」を作成した。

研究成果の概要(英文)：We held a seminar and we reported the study of weird each other. We announced the outcome by the public symposium. The theme of the symposium in the 1st year was "The weird of the Japanese literature, -it's believed? Isn't it believed?-". The theme of the symposium in the 2nd year was "Weird and cat in the Japanese literature". The theme of the symposium in the 4th year was "Death and relief in the Japanese literature-weird viewpoint-". Five Korean researchers were invited and the international symposium was held in the 5th year. The theme was "from the mortality <Death and relief in literature-weird viewpoint of East Asia-". It's decided that a book of this symposium is published. "Weird data base" and "Ccatalog of the documents about weird" were made.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本文学 怪異 怪奇 幻想 死 再生 猫 朝鮮

1. 研究開始当初の背景

(1) 「怪異」は、従来、民俗学によって領導されてきた研究テーマであったと言ってよい。たとえば、国際日本文化研究センターのホームページ上で公開されている「怪異・妖怪伝承データベース」は、35,701件の「怪異」「妖怪」に関わる事例を採取した、至って便利なものであるが、伝承・口承に重きを置いた構築のため、作品本文を重視する日本文学研究の側からは活用しにくいのが事実である。しかしながら、これに匹敵するデータベースを日本文学研究は持ちえていない。民俗学をはじめとする他分野との学術交流を深めるための前提として、日本文学における「怪異」を整理・統合する必要がある。

(2) 日本文学研究においても、それぞれの時代・ジャンル・作品毎の「怪異」研究には、かなりの蓄積がある。本研究の分担者である藤本勝義の著書『源氏物語の物の怪 文学と記録の狭間』(笠間書院、1994年)は、平安文学における「物の怪」を、史実との対比の中で明確に位置づけた記念碑的業績であるし、同じく研究分担者の佐伯孝弘の編によるCD「怪異物挿絵大全」は、主要な近世前期怪異小説の本文と挿絵を対象とした、索引機能を備えたデータベースとなっており、先駆的な業績と位置づけられるものである。しかし、現在のところ、これらの業績は、限られた研究領域にとどまっているものであり、他の時代・ジャンルを専攻する研究者には、その達成が十分に知られていないのが現状である。より広範な連携を目指すために、これまでの個々の研究業績をまとめ直し、利用しやすい形でデータを整理する必要がある。

(3) 従来の「怪異」研究は、国際日本文化研究センターや東アジア怪異学会が主体となっていたため、関西が中心となることが多かった。関東では、いまだこのような動きがなく、関西の後塵を拝していると言わざるをえない。しかし、論文収集等のデータ整理の面においては、関東が中心となることが最も効率がよいことは明白であり、情報発信源としての拠点作りが望まれる。それは、地域間の温度差を埋め、全国的なネットワーク作りの第一歩ともなるはずである。

(4) 「怪異」的な語彙や話型は、それが描かれる時代・ジャンルによって、変容するものであると考えられる。つまり、「怪異」とは、それを生む人々の意識や、社会のあり方を反映させるものなのであり、文学からそれを読みとくことは、ひいては、日本人・日本文化そのものを捉えることとも繋がっていくはずである。実際に、韓国・高麗大学の日本研究センターでは、「怪異」をテーマとした日本研究が進められており、日本文学研究が学際的であるために、「怪異」が重要な切り口となることは疑いない。単なるサブ・カルチャー的な位置づけではなく、「怪異」の背景にある社会性・精神性を視野に入れた研究

を推進する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、日本文学における「怪異」研究を、時代・ジャンルを越えた総合的な視野からまとめ直し、新たな研究を切り開く基盤を作ることを目的とするものである。

具体的には、データベース・研究文献目録を作成し、「怪異」に関わる情報を整理・統合するとともに、文学に見られる「怪異」的な話型の変遷を通史的に辿る。これらの作業によって、これまでになかった、日本文学全体を見通すための足場を構築することができるはずである。

また、「怪異」を考究することは、日本文化を照射することにも繋がる。他分野との連携のみならず、学際的な研究の進展に寄与することを目指す。

3. 研究の方法

(1) 研究会を定期的で開催し、共通テーマの下に、各自の研究を進める。その成果をシンポジウムで発表し、さらに論文にして発表する

(2) 国際シンポジウムを開催し、中国・韓国の日本学研究者とともに共通テーマを討議する。

(3) 「怪異データベース」作成のために、日本文学全般から用例を収集し、データをまとめる。

(4) 「怪異研究文献目録」作成のために、関係論文の悉皆調査を行い、データをまとめる。

4. 研究成果

研究成果として、5年間で4回の公開シンポジウムを開催したことを挙げたい。3回目までは、日本文学における「怪異」を中古から近代まで通史的に俯瞰する試みであった。そして4回目は韓国の高麗大学民族文化研究院との共催による国際シンポジウムであった。

1回目は、2011年10月29日(土)の公開シンポジウム「日本文学の怪異 信じる? 信じない?」である。中古、すなわち平安時代は全体として「怪異」が信じられた時代であったが、『紫式部集』には物の怪の存在を信じていないように思われる和歌が存在する。中世の世阿弥が書き残したのものには、鬼の存在を信じていないかのような記述もあれば、怪異を信じているかのような記述もあり、世阿弥という一人物の中に、「信じる」と「信じない」が混在していた。近世の上田秋成にも、「信じる」と「信じない」の両面性が指摘できる。近世文学には、怪異だと思ったら実は怪異ではなかったという話があるが、その背景には合理主義的な精神の伸張があり、それは儒教からの影響が大きい。この時代には様々なパターンの怪談が生み出され、妖怪のキャラクター化が起こり、怪異が多層化した。近世において、儒教

によって合理的な精神が持ち込まれたのと同じく、近代の曙である明治時代には、西洋の合理主義が移入された。近代化された人々は、非現実的な事象に対して、説明がつくかつかないかを判断するようになり、説明がつかなければ「怪異」であり、説明がつけば「怪異」ではない。説明がつくかつかないかという「ためらい」が「幻想」を喚起する。たとえば泉鏡花は「信じる」か「信じない」かの「ためらい」を作品構築の重要な手法としていた。各時代の特徴が浮かび上がり、「信じる」時代から「信じない」時代へと移行する大きな流れと、「信じる」時代において「信じない」、「信じない」時代において「信じる」という両面性をも確認できた。

2回目は、2012年10月13日(土)の公開シンポジウム「日本文学における怪異と猫」である。中古文学では猫は直接的には怪異に結びつかないが、猫が怪異に結びつく萌芽が見られる。『源氏物語』の猫がそのターニングポイントである。中世は、老猫が化け猫と同一視される言説が流布している時代であった。「猫股」の出没が語られ、中国に由来する「猫鬼」が民間に流布した。近世前期には、怪異としての猫は主に妖獣として描かれたが、近世後期になると怪異性が増して、化け物の代表格になって凶暴化するが、妖獣に対する益獣、復讐譚に対する報恩譚などの両義性も目立ってくる。近代の泉鏡花の幻想小説『黒猫』は、エドガー・アラン・ポーの『黒猫』の影響を受けているのではなく、日本の前近代的な俗信から発想された小説であり、逆に萩原朔太郎の幻想小説『ウオソン夫人の黒猫』『猫町』は、前者は西洋の心理学書から、後者はブラックウッドの『古き魔術』から発想された小説である。

3回目は、2014年10月25日(土)の公開シンポジウム「日本文学における死と救済 怪異の視点から」である。平安時代から鎌倉時代をはさんで室町時代まで、日本人にとって死者の「救済」とは、仏教的な「往生」や「成仏」であった。平安時代の『源氏物語』における「死」と「救済」の論理は、物の怪に憑依された人物の場合、一つは生前の本人の仏道への帰依、もう一つは残された者による心からの弔いである。また、亡霊として夢枕に立つ人物は、残された者の心からの弔いによって「救済」される。平安時代・鎌倉時代の往生説話に見られる「火車」は、「往生」や「成仏」をポジとすればネガとなる、死を目前にした者が見る地獄からの迎えである。「火車」は往生の妨げになる「罪」の象徴であり、念仏によって「火車」を退け、「救済」としての「往生」や「成仏」を遂げるとするのが「火車」説話の基本構造である。しかし、時代が下ると、「救済」は後景化し、地獄に対する恐怖としての「火車」が前景化して、江戸時代の妖怪としての「火車」に近づく。室町時代の能『鶴』も同じように仏教的な「救済」に基づいている。「六道輪廻」

から抜け出ることが「往生」や「成仏」であり、鶴という怪物が畜生道のみならず「六道輪廻」から抜け出ることが出来るかが、能『鶴』の主眼である。僧は鶴に成仏は可能だから仏道に帰依せよと勧めるが、鶴は自身の罪を自覚しており、成仏への不安を示している。つまり、作者世阿弥は成仏の困難さを描いているのである。このような仏教的な「救済」は、江戸時代を超えて、明治・大正の近代になると、たとえば幸田露伴の幻想小説の場合、「死」によって幸福や欲望を達せられなかった人を「救済」する方法は転生であった。つまり露伴幻想小説における死者の「救済」はまだ仏教的である。それに対して泉鏡花の幻想文学の場合、人間の世界での「死」が異界への転生によって「救済」されるという、仏教的な「救済」を超えた新しい「救済」の型を生み出した。鏡花の戯曲『海神別荘』の幕切れには、仏教的な極楽往生とは違う「死」からの「救済」を意味するセリフがある。「死」と「救済」の点で、露伴は伝統的で、鏡花は革新的であった。明治における幻想文学の第一人者が露伴から鏡花に取って代わられた時、もはや仏教的な「死」と「救済」は日本文学の重要なモチーフやテーマを担えなくなっていたのである。

4回目は、2015年5月16日(土)の国際シンポジウム「文学における死と救済 東アジアの怪異の視点から」である。韓国の研究者3名の研究発表があり、3回目の公開シンポジウムの要点を報告した後に、日本近世文学における死と救済に関する発表が行われた。韓国の研究者の発表は、一つ目は「水陸齋」という儀式に見られる死と救済について、二つ目は朝鮮王朝社会における死生観と儒教との関連について、三つ目は朝鮮王朝時代の文学に表れた死と救済について、であった。日本近世文学からの発表は、井原西鶴の『万の文反古』巻三の三「代筆は浮世の闇」に描かれた「死なせぬ復讐」という自殺妨害は往生を妨げる、すなわち救済を妨げる復讐行為であり、主人公と侍が互いに無駄に往生を妨げ合う話であるという発表であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計16件)

藤井由紀子、「火車」を見る者たち
平安・鎌倉期往生説話の 死と救済
、清泉女子大学人文科学研究紀要、
査読有、36巻、2015、7 30

藤本勝義、源氏物語における死と救済、
清泉女子大学人文科学研究紀要、査読
有、36巻、2015、31 48

姫野敦子、中世文学における死と救済

怪異の視点から、能「鶴」をめぐる
、清泉女子大学人文科学研究所紀要、
査読有、36巻、2015、49 66

藤澤秀幸、幸田露伴・泉鏡花における
「死」と「救済」、清泉女子大学人文科学
研究所紀要、査読有、36巻、201
5、67 79

佐伯孝弘、『怪談御伽桜』の破戒僧、国
学院雑誌、査読有、114巻11号、2
013、506 524

佐伯孝弘、浮世草子と京・大坂 西
鶴・其磧を中心に、日本文学、査読
有、62巻10号、2013、2 17

藤井由紀子、怪異の 萌芽 平安文
学における猫、清泉女子大学人文科学
研究所紀要、査読有、34巻、201
3、9 28

姫野敦子、中世文学の中の猫 猫への
まなざしの変化と猫股の登場、清泉
女子大学人文科学研究所紀要、査読有、
34巻、2013、29 44

佐伯孝弘、近世文学における怪異と猫、
清泉女子大学人文科学研究所紀要、査読
有、34巻、2013、45 73

藤澤秀幸、日本近代文学における 幻想
としての 黒猫 ポー・泉鏡花・萩
原朔太郎、清泉女子大学人文科学研
究所紀要、査読有、34巻、2013、
75 93

藤本勝義、源氏物語と物の怪、清泉文苑、
査読無、29号、2012、75 80

姫野敦子、揺れる中世文学 能楽の大
成者、世阿弥を例にして、清泉文苑、
査読無、29号、2012、81 86

佐伯孝弘、近世前期怪異小説の諸相
「怪異を信じるか否か」という視点から
、清泉文苑、査読無、29号、20
12、87 101

藤澤秀幸、日本近代文学における 怪異
と 幻想 泉鏡花を中心に、清
泉文苑、査読無、29号、2012、1
02 105

姫野敦子、能「善知鳥」、鳥獣虫魚の文
学史、査読無、2巻、2011、197
211

藤本勝義、物の怪文学としての源氏物語、
怪、査読無、34巻、2011、40

[学会発表](計19件)

姫野敦子、天理教「みかぐらうた」の一
伝本について、日本歌謡学会、2015
年10月11日、同志社大学室町キャン
パス(京都府京都市)

佐伯孝弘、江島其磧の時代物考、日本女
子大学文学部日本文学科、2015年9
月15日、日本女子大学目白キャンパス
(東京都文京区)

佐伯孝弘、死なせぬ復讐譚 『万の文
反古』巻三の三「代筆は浮世の闇」をめ
ぐる、清泉女子大学人文科学研
究所・高麗大学校民族文化研究院、201
5年5月16日、清泉女子大学(東京都
品川区)

藤澤秀幸、日本文学における死と救済
怪異の視点より、清泉女子大学
人文科学研究所・高麗大学校民族文化研
究院、2015年5月16日、清泉女子
大学(東京都品川区)

藤井由紀子、「火車」を見る者たち 平
安・鎌倉期往生説話の 死と救済
、清泉女子大学人文科学研究所・清泉女子
大学日本語日本文学会、2014年10
月25日、清泉女子大学(東京都品川区)

藤本勝義、源氏物語における死と救済、
清泉女子大学人文科学研究所・清泉女子
大学日本語日本文学会、2014年10
月25日、清泉女子大学(東京都品川区)

姫野敦子、中世文学における死と救済
怪異の視点から、能「鶴」をめぐる
、清泉女子大学人文科学研究所・清
泉女子大学日本語日本文学会、2014
年10月25日、清泉女子大学(東京都
品川区)

藤澤秀幸、幸田露伴・泉鏡花における「死」
と「救済」、清泉女子大学人文科学研
究所・清泉女子大学日本語日本文学会、
2014年10月25日、清泉女子大学(東
京都品川区)

佐伯孝弘、日本の怪談における 死と救
済 近世前期小説を中心に、高
麗大学校民族文化研究院、2014年8
月28日、高麗大学校(大韓民国)

藤本勝義、源氏物語とその時代 天変
地異と冷泉帝、青山学院女子短期大
学同窓会、2013年5月18日、青山

学院女子短期大学（東京都渋谷区）

藤井由紀子、怪異の萌芽 平安文学における猫、清泉女子大学人文科学研究so、2012年10月13日、清泉女子大学（東京都品川区）

姫野敦子、中世文学の中の猫 猫へのまなざしの変化と猫股の登場、清泉女子大学人文科学研究so、2012年10月13日、清泉女子大学（東京都品川区）

佐伯孝弘、近世文学における怪異と猫、清泉女子大学人文科学研究so、2012年10月13日、清泉女子大学（東京都品川区）

藤澤秀幸、日本近代文学における 幻想としての 黒猫 ポー・泉鏡花・萩原朔太郎、清泉女子大学人文科学研究so、2012年10月13日、清泉女子大学（東京都品川区）

佐伯孝弘、日本の幽霊と妖怪 その研究史と怪異観の変遷、高麗大学校民族文化研究院、2012年3月30日、高麗大学校（大韓民国）

藤本勝義、源氏物語と物の怪、清泉女子大学生涯学習センター、2011年10月29日、清泉女子大学（東京都品川区）

姫野敦子、揺れる中世文学 能楽の大成者、世阿弥を例にして、清泉女子大学生涯学習センター、2011年10月29日、清泉女子大学（東京都品川区）

佐伯孝弘、近世前期怪異小説の諸相「怪異を信じるか否か」という視点から、清泉女子大学生涯学習センター、2011年10月29日、清泉女子大学（東京都品川区）

藤澤秀幸、日本近代文学における 怪異と 幻想 泉鏡花を中心に、清泉女子大学生涯学習センター、2011年10月29日、清泉女子大学（東京都品川区）

〔図書〕（計4件）

越森彦・岩政伸治・鈴木哲平・越朋彦・海老根龍介・松澤和宏・井上隆史・助川幸逸郎・福田耕介・辻秀雄・佐伯孝弘、弘学社、文学と悪（アウリオン叢書15）2015、157、135 149

高橋麻綾・本橋裕美・外山敦子・磐下徹・松野綾・青島麻子・齋藤正志・森野正弘・森田直美・藤井由紀子・李宇玲・竹林舎、新時代への源氏学 6 虚構と歴史のはざままで、2014、311、248 274

三田村雅子・河添房江・藤本勝義 他、翰林書房、天変地異と源氏物語、2013、267、149 170

藤本勝義、笠間書院、源氏物語の表現と史実、2012、525

〔産業財産権〕
出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤澤 秀幸（FUJISAWA, Hideyuki）
清泉女子大学・文学部・教授
研究者番号：20245939

(2) 研究分担者

藤本 勝義（HUJIMOTO, Katsuyoshi）
青山学院女子短期大学・名誉教授
研究者番号：60156908

佐伯 孝弘（SAEKI, Takahiro）
清泉女子大学・文学部・教授
研究者番号：40255956

姫野 敦子（HIMENO, Atsuko）
清泉女子大学・文学部・准教授
研究者番号：90334268

藤井 由紀子 (FUJII, Yukiko)
清泉女子大学・文学部・准教授
研究者番号：70551943

(3)連携研究者
()

研究者番号：